

今回の教官紹介は一般教育健康科学担当の田野有一教官です。日本の体操競技界やトランポリン競技界に輝かしい足跡を残されている田野先生に、スポーツ活動を通して歩んだ人生や、36年にわたる教員生活を語っていただきました。



「研究テーマは採点競技における ルールの変遷。 人間の本质が見えてくる...。」

たの ゆういち

田野 有一 教授

一般教育等 / 健康科学担当

● 1967年 3月 日本体育大学体育学部卒業
● 1990年 10月 小樽商科大学商学部教授

- 田野先生率いる小樽商大トランポリン競技部の全日本学生選手権Bクラス団体金メダル、個人銀メダル獲得おめでとうございます。

田野：1980年に小樽商大トランポリン同好会として発足してからもう22年になりますね。部員達が実によく頑張ってくれましてね。銀メダルを取るというのは想像以上に大変なことなんです。

- 先生は歌志内のご出身だそうですね。

田野：生まれは歌志内ですが、中学に入っただけで美唄に移りました。美唄で中学から高校までを過ごしましたが、美唄東高時代は体操競技一本槍でした。

- 高校時代から体育の教師を目指していたのですか。

田野：体育教師志望というよりも体操がやりたかったということです。実は高校2年頃までは体育の授業が嫌い、むしろ英語の教師になることが夢だったんです。受験勉強のさなか、気晴らしに行った、もう今はなくなりましたが、札幌中島スポーツセンターでの日本とソ連（当時）のオリンピック選手による体操競技の模範演技会を見たのがきっかけで、私の人生はガラリと変わりました。これ以後、私の体操人生が始まったわけですから、これが私の人生の岐路だったと思います。高校に体操部を創り、自ら部長を務め、自家製の鞍馬も作りました。運動嫌いの少年が人生が変わったように放課後に一人で体操に励んでいました。高校時代の担任の理解もあったのですが、ドイツの体操競技の本を片手に独学で勉強しました。納得のいくまで練習しましたから充実感がありました。私みたいな小柄な者でも人を感動させるスポーツがあるんだ、それが体操競技を通じて感じたことです。

- そこで当時体操競技の一流選手を輩出していた日本体育大学に進まれたわけですね。トランポリンに移られたのは・・・

田野：最初の頃は体操の技をトランポリンを使って練習していたのですが、1974年の夏にトランポリンの公認指導者の認定講習がありまして、大学の先輩に誘われ、その先輩とともに北海道で初のトランポリンの指導者団体を創ったのが始まりです。それからトランポリンに関わる役職も徐々に増えてきました。ただ、トランポリン競技はFIG（世界体操連盟）の傘下にある訳ですから、私の中での意識はあまり変わっていないんですよ。

- それから小樽商科大学にトランポリン競技部を創って22年ですね。

田野：同好会から始めて6年かかって部に昇格しました。部員とはゼミ以上のつきあいですね。全日本選手権に出るような学生も出てきました。今では土日・祭日もトランポリンにのめり込んで、部員はまるで自分の子供のような気がします。でも気は抜けませんよ。実際、大けがをした学生もいますし、長い歴史の中では、何度ももう監督業は辞めようと思ったこともありましたが、それでも、「トランポリンを通じて人生の大切なものをつかんだ」となどというOBの声を聞くと、トランポリンを通じて自分の方が支えられているんだな、という意識が出てきました。

- トランポリンは若いときは自ら選手として、また、今では指導者として、あるいは公認審判員としてご活躍されている。

田野：トランポリン競技は採点競技ですから、かなり人間くさいところがあるんです。たとえば、国際ルールにしてもしばしば変わっていきますよね。採点競技には自国の選手を有利にしたいという審判同士の戦いがある

んです。でも不偏なものもある。ルールの変遷を掘り下げていくにつれて人間そのものが見えてくる、人間の本质を知ることができるのではないかと思います。最近では研究テーマとしてスポーツルールの変遷を調べています。命懸けで技を極める選手がいる一方で、ルールを巡る争いがある、これを突き詰める人間って一体なんだろう、ということろまで行ってしまうんですよ。

- 授業を通じて見た商大生の印象は？

田野：商大生は女子の方が元気がありますね。意見をはっきり言って行動もしっかりしているのは女子ですね。男性諸君よ、もう少し頑張れといったところでしょうか。でも、総じて自分の主義・主張が弱いなあと感じます。よく言えばおとなしい、素直というのですが、悪く言えば自己表現力に欠けるといことになります。ドイツ体育大学（ケルン）に1年おりましたが、ドイツでは学生も、教官も、一生懸命勉強し、その上で自分独自の理論で勝負していました。だからそれぞれ自信があるんですね。ドイツでの授業は真剣勝負の場でした。商大生も付和雷同でなく、自分ならどうすべきかという意識をしっかりと持ってもらいたいと思います。

- これからの抱負は。

田野：ドイツで学んだように、実技、講義を問わずして授業に真剣勝負で臨みたいと思います。私は中学時代から「落語」が好きなんです。あの「喋りの間（ま）」をうまく授業で生かすことができればいいんですが。また、現在、小樽市のスポーツ振興も手がけています。スポーツを通じて小樽市民と小樽商科大学の繋がりをさらに強めていきたいとも考えています。